

昭和二十年三月、上海に向けて部隊は四梯団に改編し、先ず長沙をめざして前進を開始した。三月十七日に湖南省の祁陽県の帳家亭という所に到着した。既にこの地方の中国住民は日本の敗勢を敏感に察知しており、日本軍に対する対応も敵対的であり、食糧の調達その他にも非協力的に急変していた。遂に敵ゲリラの不意打ちに遭い戦死者、負傷者を出すにいたった。

長沙、衡陽を経て漢口、上海に到着する間、筆舌に尽くし難い辛惨を嘗めて上海郊外の新陣地構築予定地に到着することができた。

ついで終戦となり、昭和二十年十二月二十七日上海北方、呉淞に集結、検閲後乗船、同夜出航、故国へ向けて眠れぬ夜を海上で過ごした。

昭和二十一年一月一日鹿児島港に入港、復員式後それぞれ故郷への家路に就いた。

## 渡河材料中隊

山梨県 三津田 泰 永

昭和十五年九月二日、教育召集により東部第九四部隊へ入隊、昭和十六年三月二十日一等兵に進級、同月二十五日除隊となる。

昭和十七年八月二十九日、二度目の召集令状が来た。それを妻に見せた時妻の顔は蒼白になった。八十二歳の祖母はポロポロ涙を流した。妻とは新婚一年そこそこの短い月日であったのである。

第一回召集解除になった昨年の夏、父は胃癌で死亡、祖母と小生だけの家族となった。昭和十六年十月、祖母とお前一人ではどうにもならないだろうと親類会議の結果、早々に結婚した妻でしたが、召集令状が来た以上新婚気分にはひたってはられない。小生はもう野戦行きを覚悟した。二度と我が家を見ることがないのではないかと思った。妻、いせ子に「後は頼むぞ、オ

「バアサンのことも」と言ったら、妻は「ゴクン」とうなずいた。二十五歳の妻がその時程頼もしく思われたことはなかった。

晩秋蚕の掃立準備をしていたが、もう養蚕どころではなかった。八月二十九日に召集令状を受け取り九月四日東京へ集合となっている。仕事は全部取り止めて出征の準備にかかった。村の方々、婦人会、青年学校生徒に囲まれて二度目の山梨護国神社に参拝。社前にて武運長久を祈願し、万歳々々の声に送られて日下部駅を出発し、九月四日、二度目の東京赤坂の大隊に集合した。今度は新兵ではなく一等兵でしたので気分は楽であった。

赤坂の大隊には二十日位駐屯していたが、その間軍装準備、予防注射等の毎日である。もう間違いないく外地行きと思った。

九月二十一日深夜一時、品川駅を出発した。汽車の窓の鑑戸は全部閉じられ外からも内からも何も見えな。翌々日は、広島の軍専用ホームに着いた。宇品港より乗船、また深夜の出航となったが、丁度台風の時

期でしたので船舶は一進一退なかなか進まず、兵隊達は全員船酔いとなり飯上げに行く者もいなかった。

出航してから七日目ようやく上海に上陸したが、足元がふらふらで歩行がやっとであった。上陸と同時に小生は目的の本隊まで輸送の班長を命ぜられた。部隊の人員二百二十名うち一等兵は私を含め十六名でした。上海から大陸を汽車で行き杭州駅に着いたのは夜の九時だった。途中無惨にも田の中に真っ逆様になって突込み、真っ赤に錆びて腹を見せている大形SLが三台もあり、忘れられない光景であった。

昭和十七年十月一日本隊に合隊し、杭州南星橋にある第一師団渡河材料中隊、中支派遣軍登第五五六七部隊に配属された。

翌十月二日、勇壮なラッパの音と共に起床し点呼、朝食、八時に錢塘江岸へ全員集合し部隊長の訓練を受ける。

今氏部隊長の訓辞には、本部隊の最大の使命は敵前上陸作戦にある、と強く説明され身震いする程緊張した。その後、機材庫を見学し驚きの目を見張った。敵

前上陸用九五式木艇と九五式エンジン搭載の舟艇が百台位整備されている物々しきであった。

翌日から猛訓練が始まった。早朝五時、部隊全員集合、東西整列、着剣捧銃して東の空を拜する、遠き我が家を思い浮かべる一刻であった。

昭和十八年三月十五日、作戦出動命令下る。杭州南星橋より本部隊の器材全部を貨車に積み込み、軍用列車三十台に分乗し南京着。南京より汽船にて揚子江を一週間逆上り武昌に上陸した。時期は三月だが初夏を思わせる暑さであった。聞けば当地方は屋根の雀が焼け落ちる程の暑さで稲作も二期作が収穫出来るという。軍装を完全武装とし、当地に七日間滞在し最前線に向かつて行軍、岳州に至る。ここを基地として渡河作戦に参加すること大小合わせて数十回に及んだ。洞庭湖を渡り安郷作戦、常德作戦、愚知江作戦、湖南作戦、第三次長沙作戦、衡陽作戦、桂漢作戦、粵漢作戦と前進し、長砂、衡陽、來陽、零陵と勝ち進んだが、昭和十九年半ば頃より物資の補給がなくなり、来るものは食塩位になってしまった。

敵前渡河作戦とは必ず月の出ない闇夜に決行するのである。敵の猛襲撃、雨のように飛散する弾の中を敵前真正面に穩密に木舟を岸に置き、一舟に二十名、百舟で二千名の歩兵が待機し、青色信号弾が闇夜に打ち上げられると同時に潮のごとく突入するのである。実に壯観であり、また悲壮な場面でもある。この作戦の連続で我が部隊は全員の約三十五%の兵が戦死したものである。

昭和二十年三月來陽より南進するが、米軍機が毎日二十機、三十機と襲撃して来て、まるで家の上棟式の餅撒きのように爆弾を投下する。このため夜間に行動し、清風堂、鎮県、小唐に到着したが食糧は全く無く草の根のお粥だった。今生きているのが不思議なくらいであった。

昭和二十年六月一日、突然反転命令が下った。はるばる危険と苦勞を重ねて前進した路なき悪路を引き返すのである。夜間行動で衡陽まで引き返すのに二か月程費やした。丁度その日が終戦の日であった。

部隊の兵は敵の「デマ宣伝」と信用しなかったが、

毎日あった敵機の空爆が全くなくピタリと止んだので、だんだん納得したのである。

以後は毎日毎日後方に下がる。昭和二十年十月一日、中支威寧に到着。昭和二十一年四月九日威寧を出発し、武漢を経て武昌に到着、武昌より乗船、南京に向かう。四月二十日付にて陸軍兵長に進級した。

昭和二十一年四月二十三日、南京上陸、鉄道にて二十五日上海に到着。その後は毎日市街地区にてキャンプ生活が続いた。六月二日上海出帆、一路日本に向かい、六月四日佐世保に上陸。明五日、佐世保海兵団内にて復員式を終了し、約五年振りに懐かしい我が家に無事復員した。

## 中支戦線の思い出

山口県 岡崎 哲夫

私は昭和十八年二月一日、山口市の歩兵第四十二連隊補充隊へ、現役徴集兵として入営しました。

私の入営当時の家族構成は

祖父	死去
祖母	健在 農業
父	健在 農業
母	健在 農業
本人(長男)	健在 農業兼電気工事夫
弟(次男)	健在 農業
弟(三男)	健在 学生
妹(長女)	健在 郵便局勤務
妹(二女)	健在 学生
妹(三女)	健在 学生
妹(四女)	健在 学生

という、十人家族の大世帯でした。作付面積が一町二反歩で、生活はやや苦しいといったところでした。

当時の戦局の推移状況は昭和十六年十二月八日の開戦当初よりの勝ち戦さの継続で、国内の士気は旺盛でした。

入営に際しては一月三十一日、村役場の前で壮行式が開かれ、見送られる壮丁は私一人であったが、私が